

Newsletter

2023.12.13

立教大学全学共通
カリキュラム運営センター



全学共通科目総合系科目「F科目（導入）」を見学して

全学共通カリキュラム運営センター総合系科目構想・運営チームリーダー／文学部教授
後藤 雅知

「F科目」の導入と授業内容

全学共通科目総合系科目における「F科目」は、国際センターが立教大学の一般学生と交換留学生を対象とし、2001年度に開設した英語による日本研究科目を起源としている。その後、運営が全カリ運営センターに移管され、2014年度に本学がスーパーグローバル大学創成支援事業に採択されたことを受けて、グローバル教養副専攻の修了要件となる科目として拡充されていき、さらに総合系科目のうち20%程度をF科目とすることを目指して2023年度までに急速に科目数を増やすことになった。その過程で「F科目」は性格を変えて「外国語による総合系科目」となり、授業内容は多岐にわたることになった。

さらにF科目履修学生の増加を目指して、学生の英語科目への抵抗感を和らげることを目的に、英語教材の利用を必須とするが授業の使用言語は日本語可とする「F科目（導入）」を設置し、「学びの精神」に加えた。2022年度から導入したが、学生の人気は高く、多くの科目で定員が埋まる状態となっており、2023年度には科目数を増やした。今回はそのうち次の2科目を事務局とともに見学させていただいた。

「立教大学の歴史」（学院史資料センター田村俊行助教）は、日本語でも開講されている立教大学のあゆみを学ぶ科目であり、英語教材をもとに日本語で進められる。また「英語によるビジネスコミュニケーション入門」（経営学部ドノヴァン講師）は、学生にグループをつくらせ、各グループが選択したビジネストピックに関する英語でのプレゼンテーションを最終的に実施するために、授業を聞き、話し合いながら準備を進めていく授業である。教員と学生との会話は基本的に英語で行われる。


12-1- NAME: _____

12. The first step of a fresh missionary
12-1. Japanese language, people, and culture

① As he looked at the rickshaws on the road and wooden sandals that the Japanese wore, Henry Tucker was welcomed by two missionaries, John McKim and T. S. Tyng, at the Port of Yokohama in October 1899. Although he had arrived in Japan, Tucker still could not seem to believe that he had been put in charge of a mission, so the tobacco and marmalade offered by Charles Evans and his wife in Tsukiji satisfied him for a while.

② Like the other missionaries, Tucker's first task was to spend his first year learning Japanese. Tucker and some other newcomers took lessons from a Japanese teacher for three hours every day, and they had the opportunity to talk daily in Japanese with their maid. It seems that Tucker himself was not a good speaker, and he frequently confused the maid when he mixed up words, such as "u-wa-gi" (上着, coat) and "u-sa-gi" (兎, rabbit). Besides learning Japanese, he took on light duties in schools and churches. He was in charge of teaching Greek at the boys' school for foreign children and a class on New Testament Greek at the divinity school. He also led the evening prayer in Japanese at the Cathedral.

③ The senior missionaries, though very busy, gave guidance to the younger ones.



Henry St. George
Tucker
(1874-1959)

「立教大学の歴史」使用教材



「英語によるビジネスコミュニケーション入門」授業風景

授業見学者の気づき・感想 1

(後藤雅知／総合チームリーダー)

「立教大学の歴史」は毎回決めた範囲の英語教材を、教室で時間をとって学生に黙読させ、その概要を口頭で発表してもらい、その上で教員が補足説明を行う形式で進められた。ある程度のパラグラフごとに分けて学生に読ませるので、こうした一連の作業が授業内では数回繰り返される。学生には2人ずつのペアになってもらい、黙読後に、その内容について話し合って内容を共有する過程があるので、英語がそれほど得意ではなくても、まったくついていけないということはないであろう。また教員とのやりとりや教員による補足などは全て日本語で進められるので、英語を使用するのはテキスト解読のみである。すでにテキストがかなり作り込まれているため、その内容を学生がしっかり理解できるように導くことで効果的な授業が展開できるように思われる。科目担当者の事前の周到な準備を感じられた。しかし一方で授業が1限であったためか、遅刻する学生が多く、ペアの作成やそれに伴う座席の指定のために教員が説明を中断せざるを得ないタイミングが多々あり、その対応の難しさを感じた。

「英語によるビジネスコミュニケーション入門」では、日本企業に関する説明のためのプレゼンテーションの作成に向けて必要とされるノウハウなどが、パワーポイントのスライドに基づいて英語で説明された。その使用英語は英語力が十分でない学生が聞いても理解できるように配慮されており、速度も聞き取りやすいものであった。またパワーポイントで英語が文字化されていて、教員の解説もその内容から逸脱するものではないので、それも参照すれば、英語による授業ではあるが、学生がついていくことは可能であろう。学生からの質問および教員の回答も全て英語のみで行われており、授業内で日本語が使用されるのは各グループ内での相談くらいであった。ほぼ全て英語で展開される当該科目は、「立教大学の歴史」の対称に位置する「F科目（導入）」ではないかと思う。F科目の中級・上級への橋渡しとしては、こうしたレベルが求められるのかもしれない。

今回2つの科目を見学し、「F科目（導入）」にも幅があることを自覚した。教員による授業運営の多様性は確保すべきであろうから、その幅があることは当然であろうが、その上で学生にはどのような教育効果があったのか、その検証も進めていくことで、今後の「F科目（導入）」の展開のありようを考えていくことが不可欠であろうと感じた。

授業見学者の気づき・感想 2

(谷口実桜里／全学共通教育事務室)

「立教大学の歴史」は、担当教員が作成した英語のテキストを履修者に読ませた上で日本語による解説を行い、内容理解を深めるという授業運営であった。履修者が興味を持ちやすいよう、人物に焦点を当てたテーマ設定がなされており、テキストの内容も、あまり英語が得意でない履修者でもついていけるようなレベルのものとなっていた。授業内での英語使用比率は高くないが、履修者の英語の文献を“読む”ことに対する抵抗感を和らげることが十分に期待できる。さらに、英語で自分の大学のあゆみや特色について理解することは、今後学生が留学に行った際にも必ず役に立つであろう。

一方、「英語によるビジネスコミュニケーション入門」は、英語によるレクチャー部分が大部分を占めていた。「立教大学の歴史」と同様に履修者の英語レベルは決して高くはないものの、易しい英語で講義されていたためか、授業内でのアクティビティにも意欲的に取り組む様子が見られた。履修者と科目担当者とのやり取りも主に英語で行われ、また最終授業時には各グループが英語でプレゼンテーションを行っており、履修者の英語を“使う”ことに対する抵抗感が和らいでいるように思われた。

なお、どちらの授業も履修者間で英語レベルの差があるものの、グループワークやペアワークを組み込み、分からなかった部分を履修者同士で補完させる工夫をしていたことが印象的であった。

2022年度・2023年度の「F科目（導入）」の履修充足率の高さからは、「英語力が社会において必要なものであることを認識しつつも、英語による講義はハードルが高く踏み出せない」といった学生が多くいることが推察される。英語が得意でない筆者が(おそらく2科目の履修者と同じ目線で)受講した感想としては、まさにこうした層にとっての足掛かりとなる授業であると感じた。一方で、中級・上級科目への接続の観点を踏まえると、学期の後半に向けて徐々に英語の使用比率を高めていくといった工夫があっても良いと感じた。

立教大学教育活動特別賞受賞者の紹介

立教大学教育活動特別賞とは大学において授業を担当する教員のうち、卓越した教育内容や教育方法の工夫、改善により顕著な教育効果をあげた者の中から若干名に授与されるもので、2017年度にスタートした（3年に1回の開催。言語系科目は2023年度より対象）。

本号では、第3回立教大学教育活動特別賞を受賞された6名の先生方にご寄稿いただいた、受賞に際しての喜びの声や、授業内容および教育実践におけるさまざまな工夫・気づきを紹介する。

受賞者氏名：文 仙美 兼任講師
担当科目（2022年度）：言語系科目「上級朝鮮語LR1」

このたびは「立教大学教育活動特別賞」にお選びいただき大変うれしく思います。2022年4月から立教大学で授業を担当させていただいておりますが、この場をお借りして、授業担当の機会をいただいた関係者の皆さまに改めて感謝を申し上げます。

授業の内容や工夫について

「上級朝鮮語リスニング・リーディング1」は、朝鮮語のリスニング能力およびリーディング能力を高め、コミュニケーション能力の向上を目指す科目です。私は上級朝鮮語能力向上の基本は語彙だと考えておりますので、まずは各テーマと関連する語彙や表現を学び、同テーマのリスニング課題やリーディング課題に取り組む形にしています。1回目の授業で学生のニーズをヒアリングした結果、話す機会も設けてほしいという声が多くあったため、導入や振り返りにペアワークや発表など、スピーキングの要素も取り入れることで、リスニング能力・リーディング能力のさらなる向上を目指しました。クラスの人数は9名でしたので、インタラクティブな授業を行うにはとても恵まれた条件だったと思います。

授業例として1課の授業を紹介します。1課のテーマは「進路」で、学生には1課の語彙や表現（職業・能力・性格）を予習してくるよう伝えました。ほとんどの学生がきちんと予習をして参加しましたので、授業では覚えた単語を実際に使ってみる課題に取り組みました。例えば、職業名を簡単な朝鮮語で説明させたり、自分はどのような性格なのか、自分はどのような能力を持っているのかなどを発表させたりしました。リーディング課題は「営業職は向いている人がやるべきなのか」というテーマについて真逆の2つの意見を読んで自分の意見を述べるようにしました。意見を言うためにはテキストをしっかりと読み込み、理解をしていなければなりません。また、学生にとっては教員以外（非ネイティブ）の朝鮮語を聞き取るよい練習となりました。

そして、本授業では学生が能動的かつ主体的に学ぶ機会として全員がプレゼンテーションを行うようにしました。1課の「進路」というテーマを発展させた内容（自分が興味を持っている職業の紹介、どのような能力や性格が求められるのかなどを含めた内容）で日にちを分けて全員が発表しました。学生の中にはCAという職業を発表する中でその仕事をしている先輩から直接聞いたリアルな内容を紹介することもあり、実業家という職業を発表する中で実際に進めている興味深い事業を紹介することもありました。外国語での発表であるにもかかわらずとても興味深い内容で完成度が高いプレゼンテーションが多く、学生たちも教師が用意した課題より関心を持ってスライドを見ながら聞き取る練習を行うことができました。

本授業は少人数授業で9名の学生のレベル差がかなり大きかったため、リスニング課題を難しく感じる時やクラスメートの発言が理解できない時があるという学生の意見もあり、必要に応じてリスニング課題や学生の発言を教師が簡単な表現で内容をまとめたりしました。同じ理由でプレゼンテーションを準備する学生にはテキストで習っていない難しい単語を使う場合は日本語訳をつけるように伝えました。上級授業での学生の大きいレベル差にどう対応していくかはこれからの課題です。

学生による授業の完成

言語教師として18年間教鞭を執ってきていつも感じるのは、言語の授業は教師と学生の相互作用を通して完成されるものだという事です。「上級朝鮮語LR1」の学生たちはモチベーションが高い上に積極的な姿勢を持っている人がほとんどでした。授業前は予習を頑張って、授業中は目をキラキラさせながら授業に集中して、課題に積極的に取り組む学生たちがいたからこそ、今回このような賞をいただけたのだと思います。

受賞者氏名：岩井 季緒 教育講師
 担当科目（2022年度）：言語系科目「Current English 1 (Reading)」

このたびは、思いがけず立教大学教育活動特別賞という素晴らしい賞をいただき、大変光栄に存じます。授業運営のためにお恵やお力をお貸しくださった先生方および職員の皆さま方に、心より御礼申し上げます。

授業の概要

「Current English 1 (Reading)」は、国内外の英語ニュースを読んで理解し、さまざまな時事問題について学ぶことを目的とした授業で、2年次生以上を対象とした言語自由科目です。本授業の受講者は6名でした。授業は英語で行います。

教育方法の工夫など

授業実践に当たって工夫した点は、主に以下の3点です。

①アクティブラーニング

毎回の授業で教員が伝える情報は基本的なもの、かつ最小限にとどめ、学生が調べてきたことや考えたことを発表したり話し合ったりすることに、より多くの時間を割きました。最初は読む記事のリストを学生に提示して選ばせ、2回目以降は各自が自由に選んだ記事を発表してもらいました。話し合いでは、学生全員が順番にファシリテーターを務め、教員は原則として途中で口を挟まないようにしました。最後にコメントする際には、学生の視点や問題意識を名指して褒め、どんな意見も否定しないように心がけました。基本的な授業の進め方は、以下の通りです。

Weekly Quiz:新聞見出し語の語彙テスト（5分） ➡

Today's Topic：時事英語の読み方やニュースの特徴等に関する講義（20分） ➡

Mini Presentation & Discussion：学生主導の発表と討議（60分） ➡

Free News Discussion:学生が気になるニュースについて質問を投げかけ、話し合う（10分） ➡ まとめ

②ゲストスピーカーによる特別講義

時事英語の読解力を生活の中で最大限に生かすために、メディアそのものの特徴や現状を知って質の高い情報入手する力を身に付けて欲しいと考え、元新聞記者でメディア学の専門家を招いて話を聞きました。学生の感想を読むと、さまざまな部分が心に残ったことが分かりました。具体的には、報道には政権を監視する役目があることに気づいた、なぜ芸能ニュースが多く流れるのか初めて分かった、芸能ニュースはニュースと言えるのだろうか、ニュースの質を見極めるためにはメディア教育が必要だと思った、新聞ごとに特徴があるというのが印象的だった、フィルターバブルの話が興味深かった、有料ニュースの必要性が分かった、などの多岐にわたる感想や疑問が出ました。学生のコメントを講師に送ったところ、後日、一人一人に宛てて大変丁寧な返事が届き、学生を感激させました。

③同僚との協力

私の授業は同僚との協力関係に支えられています。私の所属する外国語教育研究センター内には、風通しがよく、何でも相談し合える教員間ネットワークがあります。それは、数々のFDや委員会活動や自主的な勉強会やランチミーティングなどで培われた人間関係によるものです。授業の進め方や評価の仕方、学生との接し方などで迷ったときには、勉強会に参加したり、廊下や研究室で同僚に質問したり、メールやZoomで相談したり、教材をシェアしてもらったり、と何度同僚に助けられたか分かりません。それは、この授業に関しても例外ではありません。過去に同じ授業を担当した同僚から多くのヒントをもらいました。私自身も、積極的に自分の授業の工夫を話したり、作った教材を共有したりしています。教員間の良い人間関係は、授業を豊かにし、結果的に学生のためになっていると思います。

おわりに

立教大学の学生が自分たちだけで英語のディスカッションをスムーズに進めることができるのは、全員が1年次に英語ディスカッションを受講し、自分の考えを述べたり、お互いの意見を尋ねたり、他人の考えに自分の意見をつなげたりするなどの英語コミュニケーションの基礎を身に付けていることが大きいと思います。1年次に必修授業で学んだ経験が、実際に世の中のさまざまな事象を学び、物の見方を深める上で役立っていると感じることは、学生にとって大きな励みになるものと確信しています。

受賞者氏名：野崎 静枝 兼任講師
担当科目（2022年度）：言語系科目「日本手話1」

このたびは、大変名誉な教育活動特別賞をいただきまして、誠にありがとうございます。この賞は2010年からの「日本手話」の開講以来、「受講生が手話を通して自分の人生に新しい見方を構築する」をモットーに、細野昌子先生、北川光子先生、豊田直子先生、西岡名子先生とともにチームとして力を合わせて努力してきた結果です。また、受賞に至るまでの道のりで、全カリの皆さま、メディアセンターのスタッフ、しょうがい学生支援室のスタッフの方々からも多大なサポートをいただきましたことに、心から感謝申し上げます。

私自身の体験になりますが、1998年にアメリカのローチェスター大学で言語学の授業を行っていた日本人のろう教員にお目にかかる機会がありました。その際、アメリカ人の聴者の学生を対象に授業の内容をどのようにして伝えているのかを尋ねたところ、「聴者の学生のために手話通訳が用意されています」とお答えになりました。それまで私はろう者の情報保障のために手話通訳が派遣されることは認識しておりましたが、ろう者のためだけでなく聴者のためでもあるという回答は、それまでの私の概念を覆すきっかけとなりました。

手話は言語であり、異なる言語同士の間には優劣が存在せず、互いに対等な言語として扱われているアメリカの文化的な背景にも驚かされました。手話の重要性とその文化的な意義を再認識させるものであり、異なる言語と文化を尊重し、対等に接することの大切さを教えてもらった瞬間でした。アメリカでは多くの大学でASL（アメリカ手話）が講義の一つとして取り入れられており、日本と比較して多くのろう者がさまざまな職種で活躍しております。手話ができる人材を育成することが、ろう者・難聴者の活躍の場を広げていくことにつながると思うと、大学の講義に「日本手話」を取り入れることの重要性を感じています。

日本では2011年に法律で手話の言語性が認められ、少しずつさまざまな大学で手話が言語科目の一つとして導入されるようになりました。社会では手話言語条例が各地域で次々と制定され、10月時点で36の都道府県、市町村含めて506の自治体で成立しました。手話への理解を広げるためのイベントが各地域で開催され、映画やドラマではろう者の役は当事者が担うようになりました。その架け橋となっている手話通訳の存在は大きいものです。

日本手話の講義には1から4までありますが、日本手話1の最初の講義で「手話は視覚言語なので講義中はテキストを見ず、手話を見るように」と指導しています。またCanvas LMSにアップしてある復習動画、YouTube、およびテレビの手話に関わる動画などを積極的に視聴するよう促しています。視聴したときは、コメントシートに記入すれば積極性として評価することを伝えると、毎回さまざまな動画を視聴していることがコメントシートを通して分かりました。

「実技」の他に「コラム」の時間を設けています。実技では絵やイラストなど視覚的教材を駆使して音声なしでインタラクティブに指導し、ペアワークやグループワークを取り入れ、学生同士が視覚によるコミュニケーションで異文化を実体験します。コラムでは「ろう文化」や「ろう者の生活・スポーツ」をテーマに、手話に読み取り通訳をつけて紹介しています。コラムは15分と短時間のため、配布資料で情報を補っています。手話と文化的な背景を同時に学習することで相互的な効果を得ていると感じています。2021年度から全国手話検定試験が全カリの言語B検定試験受験料補助の対象になり、おかげさまで以前より検定試験に挑戦する学生数が増えました。

日本手話を受講した学生に「受講した皆さんは同志だと思っています。日本ではさまざまな背景により、手話を学びたくても学べなかったろう者・難聴者もいます。相手を尊重した上で、ベストなコミュニケーション方法を選択し、共生社会に向けて自分は何ができるのか、考えられる人材に成長して欲しい」と折々に伝えています。今後も、受講生には新たな見識発見と異文化体験の場を提供し、共生社会で活躍できる人材の成長を促す講義にしていく所存です。

改めまして、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

受賞者氏名：岡田 理香 兼任講師
担当科目（2022年度）：総合系科目「文学を生み出すキリスト教」

このたびは、教育活動特別賞を賜り、誠にありがとうございます。これまで私を育て、ご指導くださった総長はじめキリスト教学研究科の諸先生方、諸先輩方、授業担当の機会をくださった先生方、全学共通科目の先生方・職員の方、関わってくださった全ての方に感謝申し上げます。

また、授業運営のためにご支援くださった教務部・メディアセンターなどの大学職員・スタッフ、ならびにティーチングアシスタント学生に心より御礼申し上げます。本受賞は、授業に関わる全ての方の支えによるものです。

「文学を生み出すキリスト教」授業内容

学生たちの中には、キリスト教主義である立教大学に入学したものの、キリスト教について全く知らない学生が多い、という話を以前から聞いておりました。そのため本授業では、最低限の聖書の基本から提示することから始めました。その上で、キリスト教と文学作品との関わりについて講義するようにいたしました。

最初に、手塚治虫『旧約聖書物語』、映画『Son of God』を扱い、これらの作品によって、「旧約聖書」と「新約聖書」の概要を示しました。キリスト教の基本を押さえることができたように思います。

続いてアニメーション作品として、『アルプスの少女ハイジ』、『フランダーズの犬』、『不思議の国のアリス』を瞥見しつつ、作品に見られるキリスト教について講じました。この三作品により、「プロテスタント」、「カトリック」、「英国教会」の三つの教派を確認することができました。

さらに、近現代の作品として『ハリー・ポッター』、『ナルニア国物語』、『ロード・オブ・ザ・リング』といった学生たちに人気のある映像・文学作品を取り上げ、時代背景とともに、「キリスト教がいかにして文学の土台となってきたか」を提示しました。

これらの文学作品を取り上げながら、作家の生涯や作品の議論を紹介する際、一般的にあまり知られていない史実で、なおかつ学生たちが興味・関心を持ってくれそうな内容を選んで話しました。おかげさまで学生たちからは「作者の生き様に励まされた」、「遠い国の昔の人だけれど、身近に感じた」、「現代を生きる自分と重なり合った」といった意見をいただくことができました。

工夫改善に関する取り組み

2020年度からコロナウイルスの流行により授業形態が大幅に変化し、当該年度である2022年度はまだコロナ禍の最中でした。学生は全員マスク着用必須、私はマスクの上にフェイスシールド着用の上で、講義を行いました。そのような中で、前年度までのアンケートでいただいた意見を反映し、パワーポイントをゆっくり表示すること、動画は字幕付きで表示することなどを心がけました。

また、毎回の授業の最後には、さらに考察を深めてもらうため、課題を出しました。

2019年度までは用紙でリアクションペーパーを提出してもらっていましたが、用紙の提出・回収時に感染リスクが高まることを危惧し、Canvas LMSによる提出に切り替えました。提出締め切りを24時間後に設定することで、その間に学生たちが自由に調べたり考えたりして書くことができるようになり、質の高い自習時間を持ってもらったと感じました。また、Canvas LMS提出に変更することで、学生が間違えて用紙を持ち帰るなどのトラブルもなくなり、用紙を学籍番号順に並べ直す手間も省け、効率的になりました。

さらに、課題の中や授業の前後に質問を受けた場合は、その場で個別に回答しつつ、次回の授業でも取り上げてクラス全体に説明いたしました。

おわりに

文学の読み方捉え方は人それぞれなので、最近の研究傾向や自分の意見を表す時には、あくまでも個人的な見解であることを前もって述べておくようにしております。必ずしも教員や研究者に同意しなくても良いこと、読みの可能性は各自の自由であることを、強調してまいりました。今後も文学作品を扱う授業を通して、私自身が励まされつつ、考えたことをお互いに共有していくことができれば、と願っています。

最後に、受講してくださった学生の方々に、改めて厚く御礼申し上げます。今回の受賞を励みに、さらに邁進してまいりたい所存です。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、どうぞよろしくご厚意申し上げます。

受賞者氏名：小平 健太 兼任講師
担当科目（2022年度）：総合系科目「哲学への扉」

このたび、名誉ある教育活動特別賞を賜り、誠にありがとうございます。これまで大学の研究・教育活動に従事する中で、このような賞にお選びいただけるとは思っていませんでしたので、心より光栄に存じております。

授業の内容——“哲学すること”

「哲学への扉」は、哲学の知識や歴史を学ぶ授業ではなく、哲学の実践、“哲学すること”（philosophize）を学生一人一人が「主役」となっていく対話型の授業です。私たちが日常の中で感じている疑問や関心を参加者の間で自由に対話し、多様な価値観を知り合うことで、自分自身の理解を深めることを目的としています。「哲学」とは、哲学者が部屋にこもって一人で思考を深める営みでしょうか。必ずしも、そうではありません。例えば、本科目では「自分とはなにか」「人を好きになるとはどういうことか」「自由とはなにか」「美しいとはなにか」等といった問いを前に、すでに誰かがどこかで決めた答えではなく、自分にとっての答えとはなにかを自由に問い、考える営みです。そして、そのためには他者が必要であることに哲学の営みの本質があります。

本科目の運営において、私がなにより大切にしていたのは、学生一人一人が他者との関わりの中で「自分の問い」を見つけられるかどうか、ということでした。実際に、日々学生からも授業が終わるたび、「自分なりに決まっていたはずだった答えが、授業を終えてみたら考えがまったく変わってしまった!」「物事を自分とはまったく違った角度から見ている学生と出会って新鮮だった」といった感想を多くもらいました。ときに自分ひとりで考えている煮詰まってしまう思考も、対話を通じて哲学することがむしろ自分の思考を「自由」にしてくれる。こうした気づきの中で、学生たちが哲学の本質に触れてくれていたことに大いに喜びを感じていたことを覚えています。

授業の工夫と改善

本科目は履修者がおよそ250名もいる比較的大規模な授業でした。国内において、これだけ規模の大きい哲学対話の授業は本学だけではないでしょうか。その分、授業の進行にあたっては、私自身多くの工夫と新たな挑戦が必要でした。事前に、収容人数600名程の大教室を手配いただき、あらかじめ7名程のグループをランダムに組み、学生にオンライン学習支援システムを通じて座席表を配付します。教室では、対話の前に必ず前回の対話の内容を振り返る時間を設け、自分とは違うグループがどのような対話を行ったか、全員に共有しました。また、授業の終わりにはリアクションペーパーに対話内容の振り返りを記入させ、また次回のテーマに対する「問い」も記入させました。それにより、事前に学生から提出された問いを全て洗い出し、整理した上で次回の授業開始時に共有することで対話の活性化を図りました。その他にも、教室でインタラクティブにQ&Aやライブ投票を行えるクラウドサービスも活用し、関心のある問いをリアルタイムで可視化する等、多くの配慮と工夫を行いました。それにより、多くの学生が参加する中でも、一人一人こそが授業の「主役」であるという意識を少しでも保てるように努めながら授業を行いました。

終わりに

コロナ禍によりこれまでオンライン授業が行われてきた中で、本科目はようやく教室という共同空間において学生たちが顔と顔を合わせて自由に取り組むことができた科目でした。とても印象的であったのは、哲学に触れながら、「この授業で初めて大学で友達ができた」という声を聞いたことです。すでに述べた通り、本科目において主役は私ではなく、学生に他なりません。実りの多い授業が行えたとするならば、それは学生たちのおかげです。その点で、今回お選びいただいた賞は本来、授業を履修した学生一人一人が手にした賞であるといえます。学生たちへの感謝の言葉を述べて、筆をおきたいと思います。どうも、ありがとうございました。

受賞者氏名：兵頭 龍樹 兼任講師
 担当科目 (2022年度)：総合系科目「地球の理解」

まず、簡単な自己紹介をします。私は現在JAXAという日本の宇宙機関で惑星形成論と惑星探査を専門にしている研究者・教員です(図1)。惑星形成論とは、「太陽系はどのように生まれて進化したのか?」「太陽系の外に地球のような惑星があるのか?」などを明らかにすることを目指した研究分野になります。惑星探査とは、「世界各国と協力し、太陽系の惑星・小天体を探査する」「月や火星への人類進出を実現する」ことを目指した活動になります。

このたびは、「教育活動特別賞」をいただいたことを大変光栄に感じています。全学共通科目総合系科目「地球の理解」は2020年度から担当することになりました。実は私にとって大学で授業を受け持つことはこれが初めてで、2020年度は特別な緊張と責任感を感じていたことを思い出します。2020年度と2021年度はコロナ禍で完全オンラインでした。2022年度からオンラインと対面を両立する形式としました。完全に対面にできなかった理由は、私が年間の3~4カ月はパリ大学・IPGP (Institut de Physique du Globe de Paris) で研究活動を行う必要があるためでした。その意味で、オンラインと対面の両方を選択できたことは、私にとってとても助かりました(図2)。

全学共通科目総合系科目を受講する学生は、あらゆる専攻の学部1年次生から4年次生まででした。授業後に質問やコメントをもらえることが多くありました。今や「宇宙・惑星」は、単なる理系の興味だけではなく、文理問わず、あらゆる分野の人たちが興味を持ち参加できる「総合格闘技的」な分野だと私は信じています。そのような思いが授業を通して受講生に多かれ少なかれ伝わり、本賞をいただいたことはとてもうれしく思います。

さて、私が担当した全学共通科目総合系科目「地球の理解」について説明させていただきます。図2を見てもらうと分かる通り「地球の理解」と言いながら、ぜんぜん地球だけじゃないです。受講生には、「本授業では、地球を中心には学びません」「地球を無数にある惑星の一つと捉え、多様性を通して、地球を理解することを目指す」と伝えました。「無数にある惑星」と書きましたが、これはもはやSFではなく現実です。2023年時点で5500個以上の系外惑星(太陽系の外にある惑星)が発見されています。さらには今や人類は地球を飛び出し、太陽系内に存在する惑星や小天体を探査しています。近い未来には月や火星に人類の活動領域を広げる計画が着実に進んでいます。このような新時代に生きる今だからこそ、「惑星の多様性を理解し、他の惑星と地球を比較することで、地球という存在の理解を深める」ということを目指した授業になります。

最後に、偉そうなことを言うつもりは全くありませんが、私の教育方法の工夫・改善に関する取り組みを紹介します。スライドはビジュアル重視です。スライド上の文字は可能な限り少なくします。その代わりに授業中の話で分かりやすく説明することがポイントとなります。YouTubeなどの動画を活用することを意識しています。言い換え、または、例え話をすることを意識しています。さらに「本授業と社会とのつながり」を具体的に伝えることも意識しています。なぜなら、単純に惑星や宇宙の話をして、「日常で役に立たない」「それを知って何になる?」と思われることが多いからです。多種多様な分野の学生がいるからこそ、惑星や宇宙が各分野にどのように関係しうるかを想像し、伝えてあげることがポイントです。授業とは学生との対話だと思っています。実際に、惑星や宇宙は今の時代、全ての分野に関係します(総合格闘技であります)。以上です。ありがとうございました。

自己紹介

名前：兵頭龍樹 (ひょうとうりゅうじゅ)
 所属：JAXA(准教授相当)
 専門：惑星形成論・惑星探査

「惑星がどのように作られ、どのように進化したのか?」「惑星探査計画の創造&探査価値の最大化」

これまで：
 NASA / パリ大学(3年) → 東京工業大学(2年半) → JAXA・パリ大(現在)

*現在はJAXA(探査/水・観測)で、学生は京大(JAXAと提携がある)を指導、*2019年4月パリ。1ヶ月はアメリカにいる(NASAの惑星探査ミッション)




図1. 授業の初めに使った簡単な自己紹介スライド

今後の予定

	4/14	休み(兵頭@パリ)
	4/21	第1回 イントロ
	4/28	第2回 地球の姿
対面授業	5/5	第3回 太陽・星の一生
	5/12	第4回 太陽系の惑星の話(第一回小レポート)
	5/19	第5回 太陽系的小天体の話
	5/26	第6回 地球の歴史
	5/26	第7回 月の科学(第二回小レポート)
	6/2	第8回 系外惑星の話
オンライン授業 (兵頭@パリ)	6/9	第9回 惑星の作り方
	6/16	第10回 JAXAの話
	6/23	第11回 人類の宇宙進出(第三回小レポート)
	6/30	休み(兵頭@ブラジル)
	7/7	休み(兵頭@シンガポール)
	7/14	休み(兵頭@シンガポール)

図2. 本授業のスケジュール

全カリニュースレター No.56
 発行 2023.12.13
 発行人 浅妻 章如
 編集人 飯島 寛之、松本 句子
 発行所 立教大学 全学共通カリキュラム運営センター